

儀礼をめぐる情報の表象と編集 —強飯式の人類学的研究—

Representation and Rewriting of the Information on Rituals: An Anthropological Study of *Gohan-shiki*

松田 俊介 (Shunsuke Matsuda) 紹介：原 知章

本研究は、栃木県の日光周域に広く分布する強飯式と総称される儀礼を対象とし、文化的慣行が、現代の地域的な事情を受けつつ、いかに情報的に作られているか、どのような広範な領域の事象とつながっているか、儀礼同士がいかに関与しあい共在しているかについて、追究していくものである。そして、強飯式の事例検討を通して、民俗的な情報が多種多様に介在する現代の儀礼人類学の方法論模索もおこなっていく。

第1章では、儀礼人類学の先行研究の検討とその課題の提示、強飯式についての先行研究への検討をおこなって、本研究の儀礼人類学・強飯式研究としての位置づけと志向を示した。強飯式とは、修験者等に扮した人物が、あらかじめ設定された「頂戴人」に対して米飯などの食物の大食いを強いる食責め儀礼であり、その奇抜な様式によって地域内外で人気を博している。注目すべきなのは、同じ日光山にて隆盛した日光修験を源流としていながら、儀礼の方法や大食の意味づけが、分布した地域によって大きく異なっており、それぞれ独自のローカル化が施されている点である。先行研究を受け、本研究では、人々がどのように儀礼の実際や意義内容を書き換えているかを、強飯式という多様な展開をみせる儀礼について、各地で実施したフィールドワークをもとに検討する。

第2章では、強飯式について、その来歴と各地域での実勢について検討し、強飯式という多様な形態をとる儀礼の系統理解を試みた。まず、栃木県日光市山内の輪王寺において、毎年4月3日におこなわれる「日光責め強飯式」に対する歴史的検討をしたところ、強飯式という習俗は、元は日光開山以来より修験者がおこなってきた里の人々への食の振る舞いの行事だったものが、東照宮造営以後に現行のような激しい責めをとまうようになったものと推測できた。それ以降、輪王寺が徳川の威信の発揚のために諸大名に向けておこなった行法が広く周辺地域に伝わったものと思われる。また、1975年に実施された栃木県教育委員会による県全域での強飯式の悉皆調査では、調査時点で総数84、現存30事例が確認されており、当時からすでに衰微がきわだっていたもようである。これを受け、2012年から2014年にかけて筆者がおこなった追跡調査では、明確な現存が新設を含め9事例であり、庚申講やお天祭などにもなっ

ておこなわれていたという慣行がほぼ確認できなくなっていた。休止・中止地域の関係者からは、その理由として、実施世代の高齢化や過疎化、就業形態の変化、運営の経済的逼迫、ノウハウの消失などのさまざまな“実施の困難”が語られたが、これらは実施中の地域においても例外なく重要な課題とされている。しかし、それらへの対処のありかたが、各儀礼の様式・運営に色濃く盛り込まれており、多様なかたちで意味づけられていることがわかる。

第3章では、栃木県日光市七里の生岡神社において、毎年11月25日に例大祭として執り行われる「子供強飯式」を対象に、祝祭における逸脱的な食慣行を、先学の儀礼概念や消尽概念をふまえて、社会における食の文化的機能を焦点に分析した。子供強飯式では、子どもが強力・山伏という修験者の立場になり、頂戴人となった大人（修験者役の子どもの親など）へと激しく口上と、米飯の食責めをおこなう。運営は、古参が多く住む地域、かつて近隣から祭りに加わった地域、ニューカマーが多く住む地域が、3組の祭り組をなして一年交代で携わり、それぞれが独自の儀礼流儀や運営方針をとっている。子供強飯式を七里の人口動態とあわせて分析していくと、日光市の経済的画期（1955年前後や1990年前後など）のたびに中心街からの集団転居の受け皿となってきた七里が、輪王寺より伝播した強飯式を、制裁型加入儀礼へと転化し、転入者に対する仲間入りの機会として活用するようになったと解釈できる。そのために、強飯の儀のあとにおこなわれる（七里においては儀礼食・救荒食・贈答品などのさまざまな意味をもつ）里芋大食の実際の強制、五辛（菜膳の珍菜）の強制、責めのパフォーマンスなど、七里独自のローカルな情報を多数用いて、脱規範的な荒々しい表象を作り上げてきた。ここには、高位の者たちによって完結される正統な強飯式をただ模倣することをよしとせず、正統に対抗し、パラドクシカルな儀礼のなかに自分たちの民俗の情報を介在させようとする、七里住民の志向をみてとることができる。

第4章では、栃木県鹿沼市上粕尾発光路の妙見神社において、毎年1月3日、新春の恒例行事としておこなわれる「強力行事」を対象として、儀礼の転倒性・侵犯性を現代的／情報的な視座から分析した。強力行事は古法の色合いを最も強く伝承され続ける強飯式といわれ、国によって無形

民俗文化財に指定されたが、補助金等をめぐる行政との対立が儀礼内容に含まれるようになった。古くからこの地の大夫とよばれる役目の当屋行事として実施されていたが、そこには地域内の名士への一年の実績への評価（タナオロシ）の意味が含まれていた。現代においてはこれも大きく書き換えられ、儀礼の運営者が、市長を含めた行政役職者を頂戴人として招待し、「儀礼運営への補助金助成要請」「放射能被害対策要請」「獣害対策要請」「通信インフラ整備要請」などの文脈を、口上として責め立てている。これらの責めは修験者の出で立ちというミスマッチもあって、新春行事の祝賀の笑いの雰囲気の中でユーモアまじりにおこなわれるが、その実、インフォーマントによれば、それぞれの文脈が地域住民にとっては非常に切実なものであった。儀礼以外の機会においては少なからぬ緊張感を醸す議論もあるだけに、直截的な言及ができるこの儀礼が、重要な陳情の場となっているのである。当地の歴史的背景もあわせて考えれば、強力行事は、祝祭的な社会的立場逆転をはらむ、いわゆる儀礼的役割転倒 (ritual role reversal) の一様態として読むことが可能であり、修験者の強力・山伏——山間に暮らす住民の象徴としての側面を色濃くもつローカルシンボル——という歴史的・異形的権威によって、政治的権威に対抗していると解釈できるだろう。ただし、そこには、本来は日常的に許容されないような儀礼の次第が事前了承されているという、相互の厚い信頼関係が担保されてきたという前提があり、そうした住民と行政役職者とのあいだで築かれてきた独自の絆も、儀礼を構成する重要な要素である。

第5章では、栃木県栃木市家中地区の鷲宮神社において、新しく創設された神事・「強卵式」を事例とし、地域社会における食を伴う儀礼が、伝統的なものとして創造されていく過程を分析した。強卵式では、酒の痛飲と卵食禁忌を柱とする儀礼が行われており（創設年は2001年）、起案段階より多くのアクターが介在し、多様な指向性が統合されてきた。たとえば、宮司は当地の神使であるお酉様にまつわる伝承を再表象することを企図し、神楽保存会は住民が祭りに参与する儀礼のありかたを望み、宮司が相談したコンサルタントは広く外来者も参加できるようにイベント的な売り込みを計画していた。彼らの話し合いの結果、責め役の猿田彦が、市長をはじめとした頂戴人たちに対して、大量の酒と卵を飲食するよう激しく責めるものの、頂戴人たちが卵のほうは強く固辞し、地域のお酉様への信仰を宣言するという、調査時の強卵式の方式ができあがったのである。儀礼によって、参観者に当地の民俗を知らしめるという強

烈な禁食（鳥とその卵）の戒めが設定され、それを即座に参観者に実践させる儀礼内容が、参与性の高い伝承装置として機能し、地域民俗を通じた参観者同士のコミュニケーションが紡がれていった。こうした強卵式のありかたは、この地の習俗を知る氏子だけではおそらく作り得なかったものであったが、外部者の異質な起案を基点に問題提起がなされ、結果的に自文化を再帰的に振り返りつつ律しようとする、民俗的な志向性とスペクタクル性とが両立された擬制的な伝統儀礼が成立したのである。

最終章である第6章では、各地域の住民や関わる多くのアクターが、いかに自身の民俗の情報を解釈し（ないし読み換え）、書き換えてきたかを総括した。強飯式の儀礼の過程は、輪王寺が仏教式、その他の事例が神道式でありながら、祓禍・飲酒・強食・再分配と、酷似した（シンタグマティックな）手順をたどる。しかし、同構造内での（パラグマティックな）内容において相違し、各事例とも日光責めからの代置的操作がきわだっていることがうかがえた。これは儀礼過程だけではなく、責め道具などの呪物（巨大煙管・肘比・ねじれ責め棒・薙刀など）や、責め役・頂戴人の風貌／位置づけ（密教修験僧・子役・異形の修験者など）、強食や再分配の対象となる食物（米飯・赤飯・里芋・卵など）についても同様の変換が施されており、一連の多彩な対比構造系をなしているといえる。すなわち、各強飯式はこうした体系のうちに位置づけられつつも、地域の創造性・独自性を流儀の範疇で発揮し、結果として各儀礼要素が拮抗しあう構図を構成した。これは、無批判な同一慣行が拡散実施される以上に、当該地域にビビッドなローカル・アイデンティティを構築する機制なのである。

強飯式にみられた「分化」は、たんにそれぞれに独立した多様な様式を作り出しただけではない。儀礼の裏局域の複数性・せめぎあいが生成的な共在の構図をなし、各様式を活性化させる「文化の拮抗作用」ともよぶべき効果を生み出してきた。そこには、多様な主体がコミュニティの複雑性や異種混淆性、非正統性や不完全性を真摯に受け入れつつ、自らを問い直し、葛藤し、協議し、創造し続けるという実践があり、それ自体がひとつの自文化性のあり方ととらえることができる。強飯式の各事例のように社会定着した慣行には、ブラックボックス化された実践の歴史があり、それぞれが非常に動的・相互的な交渉過程を内包している。こうした過程で人々が行ってきた情報的な表象・編集の営為を再可視化することこそ、現代における儀礼人類学的要諦といえるだろう。